

笛吹川ふえふきがわ

玉元 清

前方の席の女の子たちが機窓へ身をよじりながらざわつくので、こちらもつられて外を見た。中央席から、タイミングよく、トライアングルになった池間島と大神島と鳥島とりしまの島影が、小さくかすんで見える。

―文哉、母さんからだが、明後日あさって祭りをやるから、明日のうちに、笛を持って必ず帰ってこい、って

兄の恵蔵から会社に電話があつたのは昨日の午後だった。が、漫然と外の光景を見てみると、その後の出来事、部長から、次長もたまには古里でゆっくりしたほうがいい、と言われたことや取り急ぎの仕事の段取り、運よく取れた航空チケットなどが遠い日の出来事のように思える。しかし今の時期、島に何の祭りだろうか。毎年届く島の区長の年賀状では『節盛スツムイ』は四月だった。だから、今回の祭

りが節盛スツムイでないことは確かだ。

機は、滑るように宮古空港に降りた。ポン
ポン船の出港時間まで十分に余裕があったの
で、空港ターミナルレストランで早い昼食を
取ることにした。店内は混んでいた。窓際の
カウンター席に座ってソバを注文した。

―昨日の夜明け前、鳥島とりしまの上空を黒い雲が
覆ってよ、稲光がすごかった。そしたら今度
は、島から白い光が出て、雲を押しつけて天
に昇っていった。あれは何だったかねエ

―ウチも見た。昨日は月夜だったからはっ
きり見えた。あれは何かね

鳥島とりしまの名前が出たので聞き耳を立てる。池
間島の女性たちだ。アクセントで分かる。女
性たちは口々に光の正体を推測し合い、最終
的には、神様の島だからよウチらには分から
んさあ、とまとめた。それから、水鳥が飛び
立つように席を立った。

潮を含んだまとわり付くような暑さに急せき
立てられて、僕はタクシーに乗る。エアコン

が効いて心地よい。市街地を抜けて十数分、島尻集落を通る。道路わきに奇祭『パーントウプナハ』の主人公・全身泥塗れの妖怪像バイレントウが立っている。そろそろ狩俣漁港。鳥島への唯一のアクセスが狩俣漁港から出るポンポン船で、鳥島とりしまには三〇分ほどで着く。

ポンポン船に乗ると甲板に座った。船室に入って、アンタハ誰カ？前浜サダガ末っ子ナア、という話になると応対が面倒だ。ポンポン船が池間大橋を潜る。日差しは暑いが、潮風が心地いい。

甲板から鳥島とりしまを見る。池間島と大神島よりもっと沖、群青の海面から、嘴の長い深緑の水鳥が顔を出して池間島の方を向いている。

鳥山とりやまの頂上から少し下った所のこんもり広がる木々の茂み、あのあたりが『守神様もりがみさま』がおられる『世主杜よすぬま』。守神様もりがみさまがお住まいになっている『守り祠まもほこら』は、木々に覆われてここからは見えない。

世主杜よすぬまには泉がある。その泉から溢れ出た

水が『青川』^{あおかわ}になって下流に流れている。昔話では、島建ての神様が天界から降りたとき、最初に杖を挿した所が泉になったと伝えられている。ただ、世主杜^{ユーススムイ}には守神様^{もりがみさま}の許しを得た者しか入れないので、これらの話は、これまでに聞いた話のまとめでしかない。

山頂の近くに水量豊富な泉があるのは不思議だ、と中学時代の理科の先生は言った。そして、鳥島は隆起珊瑚で出来ているから地中にはストローのような細い孔道が無数にあつて、それらの孔道から、地中で地下ダムのように溜まった海水が気圧などの作用で吸い上げられて、それが泉になったのではないかと仮説を立てた。そして、仮説を裏付ける実験をした。先生は、ビーカーに水を入れてストローを挿したコルクで密閉し、そのビーカーをアルコーランプで熱した。すると、ストローから水が噴出した。実験は面白かったが、僕には、泉の成り立ちと気圧の実験は全くの別物だった。ただ、鳥島の地下には空洞

が無数にあると聞いた後、突然足元が崩れ落ち、それらの空洞に吸い込まれないかという恐怖が、僕の脳裏からしばらく消えなかった。あの頃、島唯一の鳥島小中学校には、現在の倍以上の二百人余りの児童生徒がいた。

ポンポン船は嘴の付け根あたりの鳥島港に入った。防波堤の陰では子供たちが釣りをして遊んでいた。船室から黒のワンピース姿で日傘を差した年配の女性二人と、喪服のかりゆしウェアを着た中年の男性が下りた。その三人を、これも喪服のかりゆしウェアを着た男性が、ハンカチで襟元の汗を拭きながら迎えた。区長の砂川さんだ。区長さんが迎えるとは訳のあるご家族だろうか。

僕は家に向かって歩いた。徒歩一〇分。汗がじつとりと背中を流れている。

昨日の事でも、重石おもしが乗っかっていると時間の経過が曖昧あいまいになる。昨日、前浜恵蔵が朝の畑仕事から帰ると、この二日ほど守り祠に

泊り込んでいた母親のサダが、居間でお茶を飲みながら恵蔵の帰りを待っていた。

―恵蔵、那覇の恵美子と文哉に、明日帰つて来るように電話してちょうだい

急なことに戸惑いながら、恵蔵は居間に上つてサダの話を聞いた。恵美子は専業主婦だからいいが、問題は文哉だ。スーパーマーケットチェーンの会社に勤めていて毎日が忙しそうだし、それに、急に休めるかどうか。文哉には、午後、会社に電話を入れた。職場の方が周りに用件が伝わりやすい。サダは淡々としているが、サダの泊り込みといい未明の稲光と神響カントウケンといい、きっと世主柱ユーススムカイで何かが起こっている。これが恵蔵の心を重くした。

恵美子は一便で来て、文哉も着いた。向かいの家に住んでいる姉の勝子を呼ぶ。サダの指示で、妻の悦子と二人の孫は勝子の家に行かせ、今この家には、サダと四人の子供たちしかいない。消防士と保母の長男夫婦は仕事に出ている。父親の恵文は、恵蔵が二三歳の

時に海で亡くなった。

きょうだい四人が久しぶりに揃った。勝子は、恵美子と文哉の近況を事細かに聞く。そのへんは長女らしい。なにか出来ることはないかと気にかけている。特に末っ子の文哉には母親代わりに近い。

真昼の暑さが少し解^{ほど}けて、庭の梅^{せんだん}檀で蝉が一斉に鳴きだした。きょうだい四人の話が一段落したのを待って、サダが居住まいを正して言った。

「きのう未明、守神様^{もりがみさま}がお亡くなりになられた。それで、次の守神様に私になる」

サダの突然の話に、いままで和やかに動いていた空気が一瞬にして、無風状態になった。覚悟していた通りの話になった。勝子も予期していたと思うが、たぶん、恵美子と文哉には不意を衝く話で状況が理解できない。サダは念を押すようにゆっくり繰り返す。

「いいね、守神様がお亡くなりになられたので、明日から私が守神様になる」

しばらくして文哉が口を開いた。

「母さんがどうして守神様なわけ。母さんはもう七五歳だよ。母さんは前浜サダ、僕たちの母さん。守神様ではないでしょう」

文哉はサダを諭すようにゆつくり話す。もしかしたら、呆けたか気が狂れたと思っっているのかもしれない。

「文哉、あんたは、子供のころに島を離れて島のしきたりのことは知らないと思うが、島には島のしきたりがあつて、守神様の選び方が決まっている。そして、今度、母さんが守神様選ばれた」

「守神様には霊力があるけど、母さんには霊力なんてないでしょう。霊力もないのに選ばれるはずはないでしょう」

「今まではそうだったけど、守神様に行けると、島建ての神様がちゃんと霊力を授けてくださる」

「しかし、本人の了解や周りの了解もなく勝手に決めるなんて、それは誰が聞いてもお

かしいよ。そんなのは断ればいい。島のしき
たりで選ばれたというなら、……だったら島
を出てよそで暮らそう。とにかく、母さんは
守神様にならなくていい。断ればいい！」

文哉は投げやりな言葉を残すと、台所に立
つて、冷蔵庫の冷えた水をコップに注いで飲
んだ。突然のことで動揺している。恵美子も、
血の気が引いた顔で瞬きを繰り返している。
数分間の沈黙が続いた。恵蔵たちが生まれた
後、守神様の交代はこれまでに三回あった。
そのいずれも島で暮らしている勝子と恵蔵は
憶えているが、恵美子と文哉は、幼かったと
か、島外に出ていたとか、受験勉強中だった
とかで身近な記憶にはないと思う。

恵蔵はその場を元に戻すように文哉を呼ん
だ。文哉はしぶしぶ元の場所に座った。

サダが話し始めた。

「島建ての神様には選んでいただいたが、
守神様になるためには、最後に家族へのお試
しがある。それは、私が筏いかだに乗って青川を下

るのを家族で成し遂げることだ」

サダは一口お茶を飲んだ。

「本来なら、これは島をあげてみんなで祝う祭りだが、島民がはしゃいで、先の守神様が亡くなったことが悪霊に覚さとられたら何が起ころか分からない。それで、島建ての神様は、子供たちだけで行う祭りにして、島民のみんなには密やかに見守らせることにした」

サダは、茶碗を静かに盆に置くと、祭りの段取りを話し始めた。

「祭りでは子供たちの役割が決まっている。まず、長男の恵蔵は筏を作りなさい。筏を作る材料は、既に大道屋の幸夫さんが準備している。作り方も、幸夫さんから習いなさい。勝子と恵美子は、恵蔵が作った筏を、守り祠の青川の岸まで運びなさい。文哉は、勝子と恵美子が筏を守り祠まで運んだ後、私を背負って守り祠まで行く。その後、私は筏いかだで青川を下るが、文哉は、私が筏に乗って世主ユーススムイ杜から青川を下り、そして再び守り祠に戻って来

るまで笛を吹き続けなさい。青川は、洞穴の中で二つに分かれ、一方は内海うちうみへ向かい、もう一方は外海そとうみに向かっている。万が一、筏が外海に流れてしまったら私の命はない。が、この笛には島建ての神様の霊力が宿っているから、文哉が心を込めて吹けば、必ず筏を内海の河口に導いてくださる。恵蔵は、その河口で、私が青川を下りて来るのを待ちなさい。そして、私が下りてきたら、私を背負って守り祠に戻りなさい。文哉は、私と恵蔵が守り祠に戻ったら笛を終わりにする。そして、次の日から、恵蔵は、毎朝毎夕の食事をはじめ、私の身の回りの世話をすることになる。また、守神様の言葉をみんなに伝え、島のみんなの声も、恵蔵が私に伝える。……それから、恵蔵には別にもやることがある。それは、新しくツカサン司女になる女性たちへの連絡だ」。

サダは、またゆっくりお茶を飲んで、ツカサン司女になる女性たちの名前を恵蔵に伝えた。サダの声は、いつもの優しいサダの声ではない。凜

として威厳があつた。

「ウチらが世主杜ユーススムイに入ってもいいわけ？」

恵美子が間違いを咎めるように聞く。

「襖ミソぎ着物キモノを準備してある。それを着て、

裸足で世主杜ユーススムイには入る」

サダは淡々と応える。恵美子はほかにも何か言いたげだが言葉が出てこない。子供たちに祭りの段取りを説明したサダは、少し仮眠をとりたい、と裏座に行った。しばらくして文哉が口を開いた。

「兄さん、子供の役割が決まっているなら、もし僕が今、足を怪我して母さんを背負えなくなったら、祭りは中止になるわけ？それなら僕は足を折ってもいいけど」

「馬鹿なことを言うものじゃない。これはウチら家族だけの問題じゃない。母さんも、自分から進んで守神様になるわけではない。島建ての神様選ばれて覚悟している。ウチらがこの島のしきたりを途絶えさせたら、島の未来も一緒に途絶えさせてしまうことにな

る。文哉もそれを分かりなさい」

恵蔵が口を開く前に、勝子が厳しい口調でたしなめた。

「大道屋の幸夫さんに会ってくる。今は取り込んでいると思うが、早いほうがいい」

恵蔵が立ち上がった。

「大道屋？」

恵美子が勝子に聞いた。

「お亡くなりになった先代の守神様もりがみさま・新城

美代さんのお家うち」

勝子が答えた。

サダは、子どもたちの声を裏座で聞きながら一五年前を振り返る。

還暦をみんなに祝ってもらってふた月ほどが経った夜、大道屋の長男が家に訪ねて来た。

そして、新しい守神様が、サダたちを『司女ツカサシ』として集めていることを告げられた。午前中

に此クマカ彼カ会カイが行オわれたので覚悟は出来ていた。言ユわれた時刻ヌに世ス主ム杜ムの入り口イに行くと、既

に二人が待っていた。後を追うように三人が来て六人が揃った。お互いに顔見知りで、四人はサダの同年生、二人は、サダより一回り上の女性だった。

大道屋の長男・幸夫の案内で、サダたちは襖ミツぎ着物ギに着替え履物を脱ぎ、世主ユ柱スに入った。松明に照らされた石段を上り、守り祠の板間に座った。全員顔を伏せていた。

守神様が入って来て、島建ての由来と守神様のこと、司女ツカサの務めなどを話した。話の内容は島の人ならほとんどの人が知っていることだったが、改めて守神様から聞くと、事の重大さで体が震えた。最後に、守神様は司女ツカサ全員に縦笛を渡して言った。

「この笛はみなさんが守神様になる祭りの時に、末の男の子が吹く笛です。みなさんのうちの誰が守神様になるのか、その日がいつなのかは私には分かりません。ですから今のうちに渡しておきます。みなさんは今のうちに末の男の子に渡しておきなさい」

サダたちは幸夫から譜面をもらい、来た時と同じように幸夫の案内で階段を下り、世主ユースズ杜ムイを出た。足は地に着いていなかった。

サダたちは、それから毎月、旧暦の一日と一五日の月二回を守り祠で過ごした。守神様の身の回りの世話をし、守神様に倣って島建ての神様に祝詞を捧げ、島人たちが定期的に行う世主杜ユースズムイの清掃の指示をした。ところが、歳月とともに司女ツカサシメたちの境遇が変わってきた。司女ツカサシメになった五年後、年上の一人が亡くなった。更に五年後にもう一人が亡くなり、その後、一人は病に伏し、一人は膝の関節が悪くなって歩行困難になった。残りの一人は、男の子供のうち末の子が県外で交通事故を起こして死亡して、男の子供が長男一人になってしまった。サダの周りだけが、一五年間何の災いもなく平穏無事に推移していた。

サダの還暦祝いには、妻の綾子も仕事を休んで一緒に出席した。ちょうど長男を身ごも

っていて、その報告も兼ねていた。その還暦祝いからしばらくして、五月の連休に入る少し前、僕はサダから連絡を受けて再び島に帰った。その時、サダから笛をもらった。

—これは守神様からいただいた大切な笛だから、大事にして、しつかり練習しておきなさい。そして、いつになるか分からないけど、祭りがあると連絡を入れたら、何があっても必ず笛を持って帰ってきなさい。これは守神様からの言葉と思いなさい

と、強く念を押された。

その場で、楽譜に沿って一音一音吹いてみた。『ド・ミ・ファ・ソ・シ』の五音を三つのパターンに組み替えた旋律になっていて、いずれも、一つの音を息が続く限り長く吹き、途中で前後の音を装飾音にして変化をつけていた。誰でも吹ける単純な旋律の繰り返しだった。今思うと、一五年前のあの時から今日のことから既に始まっていたのだ。

裏座から、サダの寝息が規則正しくかすか

に聞こえてくる。僕の記憶では、僕はサダのおしゃれを二度しか見ていない。一度目は僕の高校入学の時。パーマをかけ新調のワンピースを着た。二度目は僕たちの結婚式の時。姉たちと一緒に美容室で着物をレンタルして装い、薄く化粧もした。それ以外は、サダのおしゃれ姿を見ていない。

サダは二五歳で前浜家に嫁ぎ、二年後に勝子を生み、二年ごとに恵蔵、恵美子を生んだ。僕と恵美子とは三歳の開きがある。サダは恵文を支え周りの倍以上の仕事をした。評判の働き者で、サダの働きで前浜家の畑地は増えた。僕の大学入学の準備で畑地は少し減ったが、それでも、一家の生計を立てるには十分過ぎる畑地をサダは前浜家にもたらした。その畑で、今は恵蔵が茄子やかぼちゃ、ピーマンを生産している。自分は学校に満足に行けなかったからと、子供たちは全員高校に進学させた。僕だけが大学まで進んだ。

サダの静かな寝息を聞く。サダの人生とは

何だったのだろうか、と思う。楽しいことはあったのだろうか。幸せな時はあったのだろうか。辛くて苦しいことばかりではなかったのか。明日で前浜サダの人生は終わる。一体、誰がどこで人間の運命を決めているのか。これらも総て島建ての神様が決めたことで抗あらがえないものなのだろうか。改めて、サダや島のことを何も知らなかった自分を痛感する。僕が島で暮らしたのは中学生まで。高校生の時から島を離れた。島を離れてからは世間の賑やかさに心を奪われ、島の慎ましさに辟易した。そして、忙しさにかまけて島に帰ることをできるだけだけ避けてきた。

仮眠から覚めたサダが、台所から方言で声を掛けてくる。

「文哉ー、コーヒー飲ヌマリナー？」

「ジョウブン、歩アキ来クーリイ」

僕は思わず慣れない方言で、コーヒーを断り散歩に出ると応えた。明日、サダを背負って歩く世主杜ユーススムイまでの道を、今日のうちに歩い

ておきたかった。外に出た。梅檀せんだんの蝉が一瞬
 鳴き止み、一呼吸置いてまた鳴き出した。太
 陽の熱量は少しも衰えていない。鳥山とりやまが見え
 る。つい心の中で頭こゝろを垂れる。集落の中を通
 り畑地を左右に見ながら歩いた。島の人々と
 道で出会うが面識はない。軽く会釈をする。
 人里を離れ、アダン葉が茂った道をしばらく
 歩くと鳥山入り口に着いた。へ鳥山入り口の
 看板が立っている。ここからは低い木立並木
 の緩やかな上り坂が続く。二〇分ほど歩いて
 世主柱ゆいぬすむいの入り口に着いた。半間ほどの間隔で
 二本の低い木が植えてある。低い生垣が左右
 に伸びている。西に傾きかけた陽が、木洩れ
 日となって世主柱よすすむいを照らしている。僕は、入
 り口の前に立って世主柱よすすむいの中を見た。石段が
 ある。守り祠まもほくらに続く石段なのだろう。明日、
 僕はサダを背負ってこの石段を上る。石段の
 向こう側で蝸ひびくが鳴きだした。梅檀のクマゼ
 ミとは違う単調な響きだ。

夕食は、平良の高校に通っている恵蔵の娘

二人、平良で就職している勝子の次男と三男も帰ってきて、子供四人、孫六人、曾孫二人、婿と嫁と孫嫁の合計一五人が揃った。勝子の夫の勇作と長男が見繕った海鮮物が、卓袱台を華やかにした。賑やかに食事をして、それぞれが得意な芸を披露した。サダは心底楽しそうにご馳走に箸を付け、手拍子をとった。僕は一人で来たことを後悔した。

九年前の帰省は、長男が入学してしまうとそう簡単に家族旅行もできないから、と綾子が計画した。ちょうど会社が夏季休暇を取り入れた時で、その推奨の意味もあって僕の都合もよかった。綾子と長男と三歳の次男は内海で存分に遊び、家に帰ると、鈴なりにとまっている梅檀の蟬を取った。恵蔵は、梅檀の太い枝を利用してブランコを作った。二日目のお昼前に家で寛いでいると、区長の砂川さんが挨拶にみえた。その日の夜は同期生と酒を飲んだ。あの頃と今と島はほとんど変わっていない。変わった事といえば、トイレが水

洗になったことだろうか。あの頃、サダはもう守り祠に通っていたのだ。

昼間、世主杜^{ユーススミ}に出かけるときにサダのコーヒーを断ったが、もしかすると、サダと一緒にコーヒーを飲みたかったのだろうか。それなら悪いことをした。相手を気遣うゆとりが僕にはない。そして、後で後悔する。

砂川昌吉は、寢床に入ってもなかなか寝付けない。疲れているせいか、昨日と今日の出来事が脈絡もなく現れる。守神様が亡くなられたのは、昨日の午前、大道家の幸夫君から連絡を受けてすぐに焼香に出かけた。二、三日臥せていて、前浜サダさんが付きっ切りで看病し最期を看取った、と聞いた。

今日は、大道屋の子供たちを港で迎え、先代守神様・新城美代さんの身内だけの葬儀に参列して、それから、今年二四歳の生まれ年に当たる山田英人君にお願いして、同年の男性六名を公民館に集めた。新しい守神様の乗

った筏を解体する係りだ。その後で、島の家々に、明日新しい守神様の祭りがあることを伝えた。各家々とも『此クマカーオー彼会』に参列する。前浜サダさんの別れと新しい守神様への祝いだ。砂川も明日は一番で此クマカーオー彼会に出る。その後で、前浜家の長男とこれからのことを打合せる。後は、前浜家の子供たちが、祭りを滞りなく執り行い、新しい守神様が誕生すればもう島は安泰だ。区長として初めてかかわる守神様の交代、抜かりがあつてはならない。

一二年前、砂川は那覇の建設会社を定年退職して島に帰った。島にいる高齢の両親のことが気になっていると、妻の和子が、那覇での生活は疲れる、島で、母親の近くで暮らしたい、と言い出した。子供たちは独立して何の支障もない。すぐに、家を長男夫婦に譲り夫婦で島に帰った。荒れた畑を整地して農業を始め、和子は、実家とも行き来した。

ようやく農業になじんできたころ、鳥島大橋の海底調査が始まった。平良市議会で鳥島

大橋の架設が議決されたのは来間大橋が開通した翌年で、鳥島と池間島に架橋すれば島々が陸続きになって便利になる、という発想だった。海底調査のことを知った砂川は、たまに友人との居酒屋の席で、橋を架けても島は繁栄しない、むしろ、外から興味本位に人がやって来て島を荒らし、逆に、島の人間は外に出て、結果的に島は疲弊するだけだ、と持論を展開した。砂川は、建築会社で架橋の仕事にも従事していて、自分のこれまでの体験からそんなことを感じていた。

海底調査は地元の新聞で〈夢の架橋・鳥島大橋いよいよ工事着手〉と大々的に報道もされ、市民も注目した。ところが、調査船の転覆事故が起こった。関係者は再度調査船を出した。しかし、調査船はまた転覆した。合計三回試みて総て転覆した。三回目には死者もいた。当事者の話では、静かな海にいきなり大波が襲ってきたということだった。四回目は誰も船に乗らなかった。そして、調査は打

ち切られた。

二回目の船が転覆した後、砂川は島の長老たちに呼ばれ区長を打診された。本来なら区長は選挙で決めるべきだが、実際には長老たちの話し合いで決める。初めは辞退したが、長老のうちの誰かが居酒屋での話を聞いていたようで、長老たちに、君は知識が豊富だし人望もある、と口を揃えて説得されたら逆らえない。それに、当時の区長が健康を害して急を要している、ということもあつた。

長老たちの話では、当時の区長は、橋ができれば島が繁栄する、と勝手に判断して守神様に『お伺い』をしなかった。さらに、某建設会社から賄賂を受け取った、という話もあつた。区長は、海底調査が始まる前に高熱が続いて平良の病院に入院した。特にどこの病気、という見立てはなかったようだが、食欲がなく、呂律が回らず、臥したままになった。六カ月ほどで退院したが、今でも島で臥せているということだった。長老たちは、船の

転覆事故も区長の病気も、これは守神様に『お伺い』をしなかったからだと当然のこととして受け止めていた。

鳥島とりしまは守神様に守られた島、という事例は、鳥島大橋のほかにくつもある。一周道路建設の話もそのうちの一つだ。

一九七二年の沖縄返還からしばらくして、離島振興の一環ということで、鳥島一周道路建設計画が行政側から持ち上がった。当時の区長も、一周道路ができると島民の暮らしが便利になると勝手に判断して、守神様に伺うこともなく道路建設に同意した。鳥島の土地は全て区有地になっていて、道路予定地の測量調査は区長の承認だけで済む。そこまでは順調だった。ところが、ブルドーザーが平良から運ばれて鳥島港に下りた途端、クローラーが解体した。何度修理してもクローラーは数メートルも進まずに壊れた。履物がなければ歩けない。それで別のブルドーザーが運ばれた。が、今度はリッパーが操作不能になっ

た。爪がなければ砂地も掘れない。分解して調べても故障の原因は見つからない。結局、二台のブルドーザーは平良に戻され、次のブルドーザーはもう来なかった。

砂川は区長になって九年目になる。

砂川は区長に就任すると、すぐに『島建て費』納入者の名簿整理に取り組んだ。

『島建て費』とは島を離れて暮らしている人たちから守神様への奉納金のこと、年間五千円と決められている。義務ではなく、金融機関に口座を設け、任意に振り込んでくるのを待つ。現在の納入者数は千二百人余。高齢で亡くなった親の後を引き継いで、島建て費を奉納する家族も多い。会社経営者は、年間の島建て費のほかに、五万円、一〇万円の寄付金を奉納することもある。大体、年間八百万円余の島建て費が集まる。そして、守神様の身の回りの世話や、関係する行事が全てこの島建て費で執り行われる。守神様の指示で、学事奨励会や島の行事にも使う。それで

も、十分な額が残り、これは翌年に繰り越す。金融機関の通帳は区長が管理しているが、印鑑は守神様の実家の長男が保管する。一年間の収支報告は区の会計とは別で、内容を守神様に報告するだけで済む。

この大事な浄財の島建て費を、これまでは大雑把な収支報告だけで済ませていた。間違いはなかったが、奉納者の気持ちを大事にしたいと考えた砂川は、通帳の氏名をたよりに三〇〇近くある家々を訪ねて係累を確かめ、さらに、職業や近況についても聞き取りをして、パソコンに入力して整理した。難儀な作業だったが、これで、島外で暮らしている人たちの顔が少し見えてきた。

名簿の整理が終わったところに市から水洗トイレ普及の話がきた。砂川は幸夫を通して守神様に伺いを立て、許可をもらい、それから市と調整をして工事に取り掛かった。水洗トイレ設置には個人負担が数万円必要だったが、これは守神様の許しを得て、島建て費か

ら補填した。

島一番の祭りが節盛スツムイである。島を挙げて行われる祭りでは、この時は、島外で暮らしているほとんどの島民が帰ってくる。

祭りでは、鳥山の萱かやを使って葉先を輪にした魔除けのサンを作り、門や家々の要所に挿す。そして、家族みんなユーススミイで世主ユーススミイ杜に出かけて生垣の前でお参りし、その後は原っぱや海岸でお重を広げる。夕方からは、公民館広場で字対抗のカラオケ大会で自慢の喉を競い、鳥島踊りやクイチャーを踊る。出店もあって大賑わいになる。

祭りの起源は、先代の守神様が亡くなった翌日、言葉を変えると、新しい守神様が誕生する前日に一日だけ守神様が居なくなる日があるが、その空白の一日を悪霊に覚られないために行う、ということである。島の記録によると、明治の中頃から現代のような年一回の大行事になったようで、昔は、実際に守神様が亡くなった翌日だけ節盛スツムイをしていたと記

録されている。これまでの節盛スツムイは四月だったが、来年からは九月になる。

砂川は、これからの島の課題をいくつか考えている。少子化を防ぐための島独自の新しい産業の創出。さらに、診療所の充実。しかし、守神様は既にお考えだろう。

サダは襖ミソぎ着物キモノを着て一番座に座る。僕たち四人の子供は、装いを正して襖を取り外した隣の部屋に座る。最初に、区長の砂川さんが七つの集落の字長を連れて現れた。手を合わせてから自己紹介をし、それから各字の字長を一人一人紹介した。砂川さんたちが退出した後、島の人たちの此彼会クマカオとなった。サダは手を合わせる一人一人に言葉をかけた。砂川さんが庭の横から入ってきて恵蔵を手招きで呼び、何か話し合っていた。此彼会クマカオは九時に始まり、午前中たつぷりかかった。

昼食は、勝子が昨夜の残り物を上手に見繕った。食事の後、サダは裏座で仮眠を取った。

庭には、恵蔵が夜鍋をして作った筏が置いてある。豊一枚より少し大きい。

「恵美子、筏を持ってみようかあ」

勝子が恵美子に声を掛けた。二人は筏を持ち上げて重さを確認しあった。筏は、枯れ木を上手に組んで、勝子と恵美子の二人にも軽々と担げた。

「恵蔵、上等さあ」

勝子の言葉に一人でお茶を飲んでいた恵蔵は頷いた。僕は笛を口に銜え、指先だけで笛の練習をした。四人とも、刻々と迫ってくる祭りの本番を前にして、何かで気持を紛らわさなければ所在がなかった。

四時が過ぎた頃、恵蔵の声掛けで、勝子と恵美子が、卵焼きとポーク炒めとおにぎりを作ってテーブルに並べた。言葉はなく、箸も遅々として動かない。サダだけが、いつもと同じように淡々と食事をしていた。

サダが風呂に入った。続いて恵蔵、僕が入った。勝子と恵美子は勝子の家の風呂を使っ

た。風呂から上がると、サダが、みんなの襦ミぎッ着物とアダンの葉で編んだ草履を準備してあった。刻々と時は過ぎる。

五時が過ぎたところで、勝子と恵美子は意を決したように襦ミぎッ着物ンに着替えた。そして、奥に座っているサダの側に行き、肩を抱き寄せそれから手を握った。

「母さん、体に気をつけてよ」

恵美子が堰を切ったように声を上げて泣き出した。勝子もそばで目頭を押さえた。

「大丈夫、心配しなくていいから」

サダは二人の背中に手を回し、二人の気持ちチが鎮まるまで、幼子をあやすように背中を優しくさすった。

「行って来るね」

勝子と恵美子は、涙を拭きながら立ち上がり、庭に出た。そして、筏の両端を縄で結び、棒を通して担いだ。二人は笑顔を作り、奥に座っているサダに手を振った。サダも小さく手を上げた。二人が出てゆくと家はまた静か

になつた。

「文哉、そろそろお願いしようかね」

サダが声を掛けてきた。その声が合図だったかのように、一番座の柱時計が六時を打つた。僕も観念して支度を始めた。襖ミぎ着物キを着て竹笛を首から紐でつるし、草履を履いて庭に降り、縁側に後ろ向きに腰掛ける。その背中にサダが負ぶさつた。

「いいかあ」

「いいよ」

サダは静かに応えた。恵蔵が声を殺して泣いていた。僕は唇を強く噛む。

通りには誰もいない。道は掃き清められ、蝉も一日の鳴きを終わって辺りは物音ひとつしない。静まり返った家々には魔除けのサンが挿してある。サダは、僕の背中に体ごともたれた。集落の道を通り、畑地を左右に見ながら無言で歩いた。アダンの茂った道を過ぎてへ鳥山の入り口に着いた。これから低い木立並木の緩やかな上り坂になる。

「文哉、重たくないか。疲れたら休んでい
いからね」

サダが背中にもたれたまま声を掛ける。

「大丈夫」

僕は応える。サダは、羽のように軽い。

「文哉は、生まれたときは標準体重ぎりぎ
りの赤ちゃんだったね。でも、どの赤ちゃん
より元気だったさ。泣き声は大きいし、手足
は良く動くし」

僕は黙って聞いていた。

「看護婦さんも文哉をあやしなから嬉しそ
うに笑っていたさあ」

サダが微笑んでいるのを背中で感じた。

突然、僕は昔のことを思い出した。幼稚園
児だったか小学生だったのか定かではないが、
未明に急に発熱した。恵文は漁に出て家には
いない。サダは、熱の高さが普通でないこと
を確かめると、熱でうなされている僕を毛布
で包んで抱きかかえ、ポンポン船の船主を起
こして、まだ暗いなか船を出させた。狩俣漁

港に着くと、サダは僕を背負い、まだ明け切らない道を、距離にして一五キロメートルもある平良の病院に向かって歩いた。かなり歩いた後、僕たちは通勤途中の女性の車に拾われて病院まで送ってもらった。気がつくとき、既に夜は明け一日の生活が始まっていた。あの時、サダは僕を背負って一体どれだけ歩いたのだろうか。あの時の僕の体重と、今のサダの体重とどっちが重たいだろうか。

「母さん、僕が麻疹はしかにかかった時は大変だったね」

「ああ、幼稚園の時だったね。でも、みんないい人たちばかりで助かったさあ」

麻疹の騒動以降、サダは僕を平良までよく連れて出掛けた。映画を見たりイベントに参加させたりした。

「母さん、ごめん。自分ばかりいい思いをして」

「いいんだよ文哉」

サダは、背中にもたれたまま応えた。

「母さん、守神様になるのはやっぱり止めよう」

僕は立ち止まって、胸の中を塞いでいる思いを吐いた。

「そんなことを言っってはだめだよ」

サダは静かに応えた。

「でも、母さんはまだ僕の家を見てないでしょう。雪を見たいと言っていたのに、まだ見たことがないでしょう。お寺を見て回りたと言っていたのに、京都や奈良への旅行もまだでしょう。これから僕はどんどん出世して成功するけど、僕は、そんな僕の姿を母さんに見せたいし、母さんだって見たいでしょう。これまで苦労した分、楽しむことはこれからだよ。母さんと同じような年齢の人が、那覇ではみんな楽しく遊んで暮らしている。母さんもそうしようよ。僕がきつと母さんを楽させるから」

「ありがとう、文哉。気持ちだけを貰っておこうね。確かに遣り残しはいくつかあるけ

ど、それでも、母さんは今まで十分楽しんできたよ。子供たちにも十分楽しい思いをさせてもらった。だから思い残すことは全然ないよ。だから心配ない。さあ、歩いて」

僕がサダと一緒に暮らしたのは中学生までだった。高校の頃は、月に数回サダが平良に来て、僕の間借りで泊まった。その時は、必ず油味噌や揚げ物を持ってきた。部屋の簡単な台所で料理もした。来るときはいつも、平良に用事があったから、と言いつつ、大學生の頃も、就職してからも、そして結婚した後も、サダは島の特産物や手作りの砂糖てんぷら、油味噌を送ってきた。今年の三月には、勝子の夫の勇作と長男が経営している養殖場のアーサがきた。量が多く、綾子の実家や知人にも分けて喜ばれた。僕は、サダの行為に感謝しつつも、特にお礼を言ったこともなく、忙しさにかまけて、いずれは自分が息子としてサダのためにやる時が来るさ、と都合よく言い訳を作ってきた。

世主杜ユーススマイの入り口まで来た。もう少しで水平線に触れそうな夕日が、低く刈り揃えた生垣を橙色に染めている。僕は立ち止まった。

「母さん、やっぱり守神様になるのは止めよう。帰ろう。僕はまだ母さんのために何もやっていない」

「そんなことはないよ、文哉」

サダは、背中に身をゆだねたまま、一言一言ゆっくり応えた。

「あんたが生まれた時、母さんにとっては嬉しかった。小学校に入学した時も嬉しかった。高校に合格した時は誇りだったよ。大学に合格した時はもっと誇りだったさ。学のない母さんからこんな優秀な子供が生まれて。……就職した時も嬉しかった。それも沖縄の一流会社だからみんなに自慢もしたさ。結婚をして孫も授かって、それに立派な家も建てて。あんたたちのお陰で、母さんは嬉しい思いをたくさんさせてもらった。母さんはこれ以上の幸せはないと思っている」

「違うよ。母さんは苦勞ばかりしてきた。もうこれ以上苦勞する必要はない。だから守神様にならないで、これからは那覇で僕たちと一緒に暮らそう。僕がもつともつと母さんを幸せにするから」

「ありがとう、文哉。でも、母さんはこれでいいと思っっているよ。母さんも、司女ツカサンになった時はとても不安だった。でも、先代の守神様のもとでいろいろなことをやっているうちに守神様になる覚悟もできた。母さんがこれからやるべきことも分かった」

サダの口調は淡々として迷いが無い。守神様になることに何のためらいもない。

僕は果たしてサダのことをどれだけ理解しているだろうか、と思う。襖ミぎ着物ギを通して背中のサダの温もりを感じる。四一年間、この温もりが僕を支えてきた。それなのに、僕はサダのためにまだ何もやっていない。

「文哉は母さんのために何にもやっていないと悔やんでいるかもしれないけど、十分に

やってくれたよ。確かに、文哉と話す時間は、
恵蔵や勝子と比べたら少なかった。でも、文
哉の気持ちはよく分かっているよ。だからも
う何も気にしないでいいよ」

恵蔵と勝子は、サダが守神様になることを
受け止めているのだろうか。恵美子はどうだ
ろうか。僕だけが、むずかる幼子のように身
勝手なのだろうか。

「文哉、どうして末の男の子が母さんを背
負うのかね？」

僕は黙る。

「開闢かいびやくの昔々、島建ての神様が天空から降
り立たれてこの島を造られた。そして、島の
人々が未来永劫に平安に暮らしていけるよう
に、人間の心から我欲を取り去り、自然を畏
れ共生することを島人に教えた。島はとても
平和だった。ところが、長い年月の間に、よ
そから邪よこしまな心が忍び込んでくる。いつの間
にか人々の心に住みついて、人は我欲に操ら
れて他人をたぶらかし自然を壊す。それで島

建ての神様は、ご自身の化身として守神様もりがみさまをおつくりになって島人に教えを守らせた」

門の役割をしている二本の木と生垣の影がさらに長く伸びてきた。サダは続ける。

「ほとんどの家で、末の男の子は島を出る。けれども、島を出た島人たちが島を忘れてしまったら島の未来はない。それで島建ての神様は、末の男の子に重要な役割を与えた。だから母さんは、今、こうして文哉に安心して身をゆだねている。こうして、島は開闢の昔から今になり、未来へと続く。勝子や恵蔵や恵美子、文哉がいて、それぞれの役割があつて、島は未来永劫に続いていく」

涙が溢れてくる。

「文哉、さあ、行こうか」

サダが優しく声を掛ける。しかし、僕は躊躇ためらう。前浜サダは僕たちの母さんで守神様ではない。勝子と恵蔵と恵美子の顔が浮かぶ。此クマ彼会カヘにみえた島の人の顔が浮かぶ。

「文哉、さあ、行こうか」

肩から回したサダの手が優しく胸を叩く。
なぜか僕には抗あらがう術がない。裸足になり世主ユース
杜ムイに入る。涙で前は見えない。

守り祠は、二〇坪ほどの木造赤瓦葺きだっ
た。簡素な造りだが、歳月が造りの隅々に宿
っていて畏敬の念を抱かせる。

守り祠のそばを青川が流れている。青川は
守り祠の後方の茂みから迂回するように流れ
てきて、それから緩やかな曲線を描き、川下
へ流れている。川下には木々が茂っている。
青川は、思っていたより浅く、思っていた以
上に透き通っている。川底の岩盤が青く、夕
暮れのなかでも川全体が青く色づいている。
岸の平坦なところに筏が置いてあり、近くの
木に縄で結わえてある。

サダは、まだ少し早いから、と言って守り
祠の縁に腰掛けた。僕も川べりの近くの平ら
な石に腰掛けた。鳥か小動物か、何かの鳴き
声でした。

外海の大海原から月が昇って来た。月が昇るのを待っていたかのように残照が一瞬にして消え、辺りが薄暗くなった。その暗さに月の明かりが少しずつ射してきた。

「月の昇り始めは青川の流れが速いから、少し待とうね」

とサダが言った。淡々としていた。

青川の萱かやの陰で光り虫が光った。川の流れに揺れてスーッと光り、スーッと消えた。水平目線の月が、少し上目遣い目線になって、青川の流れが緩やかになってきた。

「さあ、文哉、そろそろ」

サダに言われて、僕は木に結わえてある筏を青川に浮かべた。音のない世界に、水音がして筏が揺れた。光り虫が数匹、筏の周りを取り囲んだ。サダが筏の中央に座ると筏が小刻みに揺れ、揺れに合わせて光り虫たちが光ったり消えたりした。

「文哉、笛の準備は出来ているか？」

「大丈夫」

僕はそう応えると、今まで筏を置いてあつた平坦な岸に座った。川の流れが下の方まで良く見えた。

「文哉、笛を吹いてごらん」

僕は笛を吹く。

「心のこもったいい音色だ。ありがとう、

文哉。これなら母さんは大丈夫だ」

サダはしばらく笛の音を聞いていた。そして、一つの旋律が終わったところで、お別れだね、と言って祝詞を唱え始めた。染み透るような長音の笛の音とサダのゆったりした祝詞が一つの調べになって、満月の光とともに世主柱チノススミの木々の間を縫い、鳥山全体に響き渡っていった。月明かりで青川が青い。サダは笛の音に合わせて体を揺らした。筏が揺れて、無数の光り虫が光ったり消えたりした。サダは筏を結わえている縄を解いた。ほど筏が静々と流れた。光り虫たちが一条の光になって筏を追う。僕は笛を吹きながら立ち上がってサダの後姿を見送る。筏は川だまり

に向かう。僕は笛を吹きながら岸の上に立って、萱や木々の間から白いサダの姿を追う。満月の明りがつくる川だまりの奥の月陰で、光り虫たちが光って、サダの姿が白く朧おぼろに浮ぶ。光り虫に導かれるように、サダの筏がゆるりゆると洞穴に入って行く。サダの祝詞が次第に遠くなる。僕は、笛の音が筏を無事に内海に導くように祈って、ひたすら笛を吹く。笛の音だけが世主ユヌスミ柱ムイに響いている。

恵蔵は、新しく司女ツカサンになる女性たちの家を訪ねた。今年が生まれ年で、年齢は還暦を過ぎていて、子供が四人以上でその内の二人が男性という条件。条件を満たす女性は五人いた。還暦を終えたばかりの女性が四人、それよりも一回り上の女性が一人。恵蔵は、彼女たちに守神様からの呼び出しを伝えた。此こゝ彼会かゝいが行われて、恵蔵の来訪の意味を全員知っていた。それから家に戻り、襖ミソギぎ着物キモノに着替えて内海の青川河口に向かった。

月が煌々と内海を照らしていた。砂浜を見ていると、月が昇るのに合わせて潮が引いて行くのが分かる。文哉はちゃんと笛を吹いているだろうか、とふつと思っただがすぐに打ち消した。文哉は今でも出世頭の管理職だが、子供の頃から、島の子供たちの誰よりも優れていた。心配ない。

祝詞が聞こえてきた。最初は小さく、そしてしだいに大きく。恵蔵は青川の河口で筏を待った。月明かりに襖ミぎ着物キが白く浮かび上がり、筏に乗ったサダが現れた。恵蔵は目の前に来た筏を砂浜に引き寄せた。途端に、今まで祝詞を唱えていたサダは気を失った。

恵蔵はサダを背負う。守り祠までは優に三〇分は掛かる。恵蔵は、背中のサダに気を使いながら足早に歩いた。行き交う人は誰もいない。この時間も新しい守神様のために道が空けられている。不思議なことに疲れがこない。一気に鳥山の入り口まで来た。木立の中を歩いていると、笛の音が聞こえてきた。サ

ダの静かな息遣いと笛の音が重なった。文哉の笛の音が二人を世主杜へ導いている。

世主杜の入り口に立つと、背中のサダが目覚めて背筋を伸ばした。何か重さが加わった。守神様だ。もうサダではない。恵蔵は、文哉の草履のそばに自分の草履を脱いで揃え、裸足になって一気に石段を駆け上った。文哉の笛の音が静かに響いている。

梅檀の蝉の大合唱と、義姉の悦子の大きな声で朝を迎えた。悦子は登園前の孫の世話で声が大きくなっている。早く！と、庭の方から孫の母親の音がする。息をすると胸が痛い。指も強張っている。眠っていたのか起きていたのか目覚めがはっきりしない。体は疲れて眠っているのに、頭の中では、一晩中笛の音が流れていた。光り虫たちが、光ったり消えたりしながら青川を自在に泳いでいた。

居間が静かになったので起きて部屋を出ると、台所の悦子が、コーヒー出来ているよ、

と明るく声を掛け、恵美子は勝子の家に行っている、と付け加えた。昨夜、世主柱ヨシヌスハキから戻ると、勝子と恵美子だけが襖ミぎ着物ギを着たまま抜け殻のように居間に座っていた。

台所のテーブルでコーヒーを飲んでいるところに、同期生の保武とさゆりが来た。島の同期生二八名のうち、島に残っている一五名のまとめ役だ。前回帰省したときに撮った写真でアルバムを作っていた。同じテーブルに座ってコーヒーを飲みながら、気が置けない話が飛び交った。悦子は食器を片付けながら、三人の話を笑って聞いていた。

保武とさゆりが帰った後、入れ違いに恵蔵が軽貨物車で帰ってきた。守神様に朝食を届け、そのまま平良の高校に通う娘二人を港まで送ってきた、ということだった。コーヒーを一杯飲んで大きなため息をつく。

「ありがたいな、文哉」

「兄さんこそ大変だったけど、これからがもっと大変だ。悦子義姉ねえさんも難儀するね」

僕は申し訳ない気持ちになる。胸の筋肉は呼吸するたびに痛いし、指先は擦り剥いたように痛い。これらは一時的なもので恵蔵や義姉のこれからは比較にはならない。

「よく蝉が鳴くねえ。那覇ではこんなに聞いたことがない。懐かしいなあ」

僕は話題を変えた。

「梅檀だからねえ。母さんが君のために植えた木だ」

「そう言えば、文哉の木、ってお義母さんいつも言っていたね」

悦子が恵蔵の言葉に付け加える。

「僕の木？……」

「えっ、知らなかったなあ？……君が麻疹に罹って平良の病院に入院した時、母さんは、病院の先生から、梅檀の木の諺とか強くて優しい木とかいろいろ聞いてきて、それで、君のために梅檀の木を植えることにした。そして、平良の造園業者にお願いして枝ぶりのいい梅檀を探してもらって、君の新入学を記念

して母さんが植えたのがこの梅檀だ」

全く知らない話だった。僕が気づいた時、梅檀はすでにそこにあつて、枝が暴れないように恵文が丁寧^{ていねい}に剪定し、恵文が亡くなつた後は恵蔵が引き継いでいた。サダはその作業を見ながら細かく指示をしていた。

「心を和ませてくれる木でさあ、花が咲いたら蝶々が沢山寄つて来るし、夏は蝉がこの通り。実が生ると小鳥たちが集まつて来る。蝶々や蝉や小鳥たちが沢山集まるのを見ながら、母さんいつも言っていたなあ。文哉も、いつかこの梅檀の木のように人望を集める立派な人間になる、って」

「そうだね。お義母^{かあ}さん、嬉しそうな顔をしながらいつも言っていたね」

悦子も恵蔵の言葉に相槌を打つ。梅檀の蝉がさらにけたたましく鳴いている。僕には返す言葉がない。

「文哉、いつでも帰つて来いよ。母さんはいなくてもここは君の島だから」

手に持っていたコーヒーカップをテーブルに戻しながら、恵蔵が言う。僕は、今度はみんなで来るからよろしく、と応えようとして、黙って頷いた。言葉にすると、堪えているものが一気に出てきそうだった。

恵美子はもう一泊するので居間でくつろいでいる。僕は五時過ぎの航空チケットを取ってあったので、三時のポンポン船に乗ることにした。勝子が、砂糖てんぷらや恵蔵の野菜、乾燥キリンサイをダンボール箱いっぱい詰めた。港へは恵蔵が軽貨物車で送った。

狩俣漁港に着いてタクシーに乗ろうとする。と一陣の風が吹き、その中の一つが僕の背中を押した。振り返って鳥島を見る。守神様になったサダが優しい顔でここを見ている。

タクシーに乗る。タクシーは、あの時、サダが僕を背負って歩いた道を、なぞるように空港へ向う。僕の頭の中の、笛の音と光り虫はまだ消えない。

〈了〉